
疫病神の黙示録

S o v i l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疫病神の黙示録

【Nコード】

N7390I

【作者名】

Sovill

【あらすじ】

霊が見える高校生の 八倉桐人は、幼い頃から 神社という環境で暮らしてきた。神社の後継ぎ候補 とされていた彼だが、彼はそれを拒む。 そんなある日、突如として彼の目の前に、謎の巫女が現れる。彼女は自らを、この神社に奉られた神だと主張する……。 混乱する桐人だが、そんな彼をよそに、未知の世界はさらに彼を蝕んでゆく。

更新

第0話 「プロローグ」

その日、八倉 桐人は、人生で一番驚いていた。

家に帰って来るなり祖父とケンカし、その弾みで

『こんな神社、継ぐ気なんかねえよ!』
などと言って、部屋に入ろうと、戸を開けた所まではいつも通りだった。

しかし、戸を開けた先からは、非現実が待っていた。だから、どうしても彼は

なるほど、お客さんか？

ああ、妹の友達か？

もしかして従姉妹か？

という現実逃避の考えしか思い浮かべられなかった。
最後には夢か、とも考えた桐人だが、やはり最後の考えすら、目の前の非現実には無意味だった。
なぜなら彼の部屋には、

見知らぬ巫女さんがいた。幽霊とか、そういうレベルではない非現実が、桐人を包み込んでいた。そして、その怪異の中心である巫女服の少女がついに口を開いた。

『我、この地に奉られし 神なり。我が祠を守護する者
の愚かさを更正する ため此処に降臨せん』

その一言一言が、まるで
意志を持っているかのように、
なぜか桐人には、それが幾つも重
なっているように聞こえていた。

しかし、彼の非日常は

まだ終わらない。

これが始まりなのだ、と、

桐人はこの時知る由もなかった。

第1話 「最後の日常」

「うがぁ　　っ!!！」

学校からの帰り道、

八倉桐人は何もかも投げ出したい気分、いわゆる鬱に似た状態に陥っていた。

「おい、いきなり大声を出すなよ」

という制止の言葉を隣から掛けてきたのは、軽そう、という言葉が似合いそうな男だった。

「黙れ変態、テメエの

おかげで俺は今、モノ凄く気分悪いんだよ・・・」

「おいおい、まだ朝の事

気にしてんのか？いい加減水に流そうぜ？」

「お前が言うな!!！」

「怒るなよ、親友だろ」

「腐れ縁と言え」

今、桐人の横を歩いているのは、彼の中学校からの

友人である、篠矢宗二だ。茶髪にくせ毛と、絵に描いたような変人だと桐人は

昔から思っていたりする。桐人曰く、彼ほどの変人はいないという

自信を持っていた。しかし、
思い返してみれば、今日
ほどツイてない日があったらどうか、と桐人は思う。朝はこの変人
のせいで

盛大な遅刻を成し遂げて

しまい、学校では自分だけ大量の数学課題を渡される始末、そして
挙げ句の果てには購買が完全売り切れになったりと、何かとてつも
なく嫌な予感がしてならない、と桐人は思う。

（俺って呪われてる？）

なんて考えたりする彼であったが、やはりこの日は調子がおかしか
った。

「じゃ、またな
」

途中で宗二とも別れ、自宅を目指す事に桐人は専念する事にした。

「帰ったら、待っているのはクソうざい、あの爺さんの口論か」

と桐人は半ば溜め息混じりで呟いた。

そして再び空を見上げる。なぜ祖父なのか、
理由は一つ。

彼は幼い頃に、事故により両親を亡くしていた。

彼はその時のことを

あまり覚えていないが、

祖父の話によると、

旅行先で火災に巻き込まれたという。

しかし、そんな事を知った所で、なにかが変わるわけもなく、ただ
親という存在を幼い頃から失ってしまった彼にとってその事実があ
まり意味を持っていなかった。

それからというものの、

父方の祖父の手で育てられそして今の暮らしは、
祖父と妹との三人暮らし。全くもって奇妙な家族構成だった。

ふと携帯の時計を見る。

時刻は午後6時、やや暗くなり始めた空を見上げて、今日八度目の
深い溜め息をついた、その時だった。

「よう、おにーさん」

ふいに声を掛けられ、
振り向く。

そこには、いた。

額から夥しい血を垂らしながら、手を振るサラリーマンがいた。

その顔からして50歳代
だろうか？そのスーツは

所々破れ、血が付着していた。そして、驚く事が
もう一つ。

若干ながらも、それは
透けていた。

こんな恰好で透けているとなれば、もう言える事は
一つしかないだろう。

コイツはこの世には存在
しない奴だと。

まさにホラー映画といえるそれを前にして、

なぜか桐人の表情は一つも変わらない。なぜか、と言われれば、
こう答えるしかない。

「これが彼の日常だから」

と。

そして、霊が見えてしまう体質であるから、と。

だから桐人は、その

「当たり前」に向かつて
返事をした。

「なんだよ、死人」

「死人とは酷いな、

全く、最近の子は可愛く　　ない……」

中年男の霊はムツとした
表情で桐人に近寄る。

「で、なんで声を？」

「まあ、なんというか、
暇だったし、ずっと、この辺を通る人に話し掛けてたんだけど、誰
も反応してくれなくて。」

「お前な、一般人に見えるわけないだろ。」

話していつも桐人は思う。俗に言う幽霊とは殆どが
こんな奴ばかりじゃないのか、と。
今までもそうだった。

ある者は泣き出し、

ある者はその場にじつと

佇み、そしてまたある者は人に憑依する。

幼い頃からずつと見てきた彼にとって、それはもう
日常と化していた。

だからこそ、彼には
やらなければいけない事があつた。

すなわち、この世から
霊体を消すことだ。

「お前、未練があんだろ？この世の中に。」

その桐人の的を射たような言葉に、中年男の霊は
驚いた表情を見せる。

「ああ、ある」

そう呟いて、間を置いた。

「娘が、心配なんだ」

そう言つて遠くを眺める。それを見ていた桐人は、
男の霊を見て言う。

「そんなに心配なら、
自分で見に行けばいいじゃないか」

「なっ……！」

その言葉に、男の霊は
驚愕の表情を浮かべる。

「でも、私のことを、
恨んでたりして・・・」

そう言つて、男の霊は
桐人に再び目を向ける。
だが、桐人は説得を
止めなかった。

「じゃあアンタは所詮
娘さんをその程度にしか
見てなかつたんだろ」

「っ・・・」

そこで男は始めて黙り込んだ。
だから、そんな彼に向かって桐人は言葉をかける。

「なら今からでも、その
娘さんを信じてやれよ」

「っ・・・！」

男は、まるで信じられないとでも言つたかのよつに、
声をあげる。

「しんじる・・・？」

「ああそうさ・・・」そして「ドメの一言を
言い放つてやった。」

「アンタが大事に育ててきた娘さんなんだから？
大事なら信じてやれよ
それでも、行かないって
言うのか？」

その一言に、男の霊は
一瞬驚いたものの、すぐに言葉を返した。

「ああ、わかった。
会いに行ってみるよ」

「当たり前だつーの」

桐人は優しくそう言った。

時刻にして午後7時。

八倉 桐人はその時、
神社の前に立っていた。

あの後、男の霊にみっちり付き合わされた挙げ句、
結局、今日が行かないなど言い出したので、更に説得を重ね、何とかあの場から離れる事が出来たのだが、気づけば既に7時を過ぎていたのだった。

そして、神社前まで
猛スピードで来て、今に至る。

「はあ、はあ、すっかり

遅くなつちまつた」

息も荒々しく、彼はやっとの事で神社に辿り着いたのだった。なぜ彼が神社に立っているのか。

理由は一つしかない。

それは、

彼の家が神社だからだ。

話によると、代々昔から

伝わる神社らしいのだが、真相は定かではない。

ただ、生まれ育ってきた

場所だという事ぐらいは分かっていた。

そして今、その神社の裏手にある正門を開けたのだがまたそこから更に20歩

ぐらい歩いた所で、

やっと本宅にたどり着く。常人ならば、ここにたどり着くまでに、かなり疲れるだろうが、毎日ここを

行き来する桐人にとって、それは単なる通路にしかならなかった。

砂利が敷き詰められた

通路を進みながら彼はこのあとの展開を予想する。

「まず帰って早々目にするのは、頑固ジジイ。

ここでいつも激しい口論が発生するであろう事は

わざわざ予想をせずともわかる。その次は妹の瑠璃、寝ていれば、万事解決なんだが、起きてた場合は

なんとしても絡み攻撃を

回避するしかない。

そして、それら障害物を
全て乗り越えた先には
我がマイルーム！」

桐人は完全にシュミレートすると、ついに玄関の
引き戸を力強く開けた。

「ふ、予想通り」

そう呟く桐人の目線の先には、彼の予想通りの人物がいた。

八倉 桐嘉

(ヤクラキリヨシ)

この神社の神主にして、
桐人の祖父である。

今年で67になるのに、
未だ走ることができる
というスキルをもつ、
恐るべき老人だった。

しかし、桐人は少しも
臆すことなく口を開いた。

「なんだよ、出迎えとは
一体どういう風の吹き回しだ？ジジイ」

その言葉にカチンときた
のか、桐嘉はすぐに声を
張り上げる。

「やかましい！！」

夜遊びなんかしおって！！貴様、それでも後継ぎ第一候補かつ！」

しかし、桐人も反撃に転じる。

「うるせえ！勝手に人を

候補に加えてんじゃねえ！だいたい継がせるなら瑠璃にしろ！！」

「八倉家は代々、男のみを継がせてきた！今更そんな事を変えるわけにはいかんのだ」

「なら他の家に譲渡すればいいじゃねえか！」

その時、微かだが桐嘉の

目が鋭くなった。

そして一言、

「貴様、それは先祖様に

対する冒瀆じゃ！

口を慎め！！！」

「そんなの知るか！！」

大体俺は神主になろうだ

なんて最初から思っすらいねえよ！！！」

それが桐人の本音だった。進路なんて幾らでもあるがしかし彼は思う。

神主だけは御免だと。

だからこそ、あの言葉を

発したのだ。そして彼は、ついに会話に終止符を打つべく、言葉を放った。

「それに、こんな神社、
継ぐ気なんかねえよ！」

そう言つて、桐人は 自分の部屋に向かう。

後ろから、「待たんか！」と聞こえたが、追ってくるつもりはない
らしかった。

(ふざけんなよ、なんで

勝手に進路決められなきゃならないんだよ！)

心の中で、苛々を潰す。

煮えたぎるような怒りが
全身を支配した。

分かつてはいた、

自分がどれだけ勝手なのか自分が伝統というモノを

どれだけこけにしているのか、桐人には分かつていた

しかし、未だにそれを

受け入れない自分がいた。

だからこそ余計に苛々したのだった。

気が付くと、桐人はいつの間にか自室の前にいた。

どうやら帰ってきたのが

瑠璃にバレなかつたらしい

これで地獄は回避できた

と、桐人は安堵の息を

つく。

最後に、もう一度だけ

瑠璃がない事を確認してから、ついに自室の引き戸に手を掛け、

開けた

開けた先、その向こう。

開けるといふ行為までは

普段通りだ。

でも、その引き戸の向こうには、間違いなく、非日常が待っていた。
だからこそ、部屋の入口で硬直してしまった。

(は………?)

そんな心の声が、桐人の
中で響く。

その引き戸を開けた先、

そこには

巫女さんがいた

だがこの時、彼はまだ知らなかった。

この出会いが、長き試練の始まりだったという事を。

第2話 「降臨した者」

(俺の部屋に巫女?)

なんで、どうして、

という疑問が自分の胸中で踊り狂う。

しかも、少女ときた。

少女の巫女さんなんて

テレビでぐらいでしか見たことがない。

(何すか、この展開?)

歳は11、12ぐらいか、えらく露出部分が多いな、などと至らぬ感想が危つく出てきそうになるくらい、いろんな意味で危険な巫女装束を着ている。

だが問題はそこじゃない。問題は、少女が誰なのかということと、何のために

ここにいるのかという事。その疑問が解けない限り、この状況を受け止めるワケにはいかなかった。

関わるな、と。

桐人の脳は命令を下す。

彼の第六感が警告を出す。だが、

そんな自分の意志に反し、

「あの」

そんな、後先考えない

最低レベルの言葉が口から零れてしまう。

失敗した、と思ったが

そこで怯まないのが彼だ。だから、今度こそよく考えた言葉を放つ。

「じっ・こんばんは！」

最低だった。

世界が終わったと桐人は感じる。

相手が幽霊だったら

まだ分かるが、

本物の人間だった場合は

取り返しのつかない事態にまで発展してしまう。

が、彼の世界はそこで終わらない。

しかし、最低な言葉を放った罰は、遠距離攻撃となって桐人に返ってきた。

「うあぶっ！！！」

一瞬、視界がぼやける。

何か硬い物が、桐人の額に直撃した。

桐人の額にクリーンヒットしたのは彼の金属製貯金箱である。

桐人はしばらく頭を押さえて身悶えしていたが、ふと妙な事に気づいた。

（物に触れた・・・？）

今飛んできた貯金箱は

どう見た所で彼女が投げた物だろう。

だが、それならば

ある一つの事実が確定する事になる。それは、

彼女は現実はこの場に存在しているという事だ。

そして、そこから導かれる結論がある。

(奴は霊体ではない)

だからこそ驚く。

神社に巫女さんだなんて

何ら違和感を感じない。

だが、その場所が

高校生である桐人の部屋になれば、話は別だ。

そして、どちらが先に

この場を支配するのが

勝負になる。

桐人の部屋は、この時点で修羅場と化していた。

しばらくの沈黙のあと、

桐人は二度目の攻撃に

転じようとした。

しかし、

「我　この地に奉られし神なり

」

驚く事に、彼よりも先に

語りだした。

そして、あまりにも現実

から離れた事を言い放ったのだ。

「え……?！」

神?

なんだそれ?

桐人は、平凡な頭脳の

持ち主は、そう考える事が精一杯だった。

しかし、そんな頭の彼

だからこそ、

彼女の次の言葉に

驚愕してしまう。

「我が祠を守護する者の

愚かさを構成せんがため、此処に降臨せん」

馬鹿な桐人でも分かる。

祠を守護する者の意味。

すなわち、神主。

そして、後は大体分かる。そんな愚かな神主を教育

するために、この地に奉られている神様直々に現れたと

「はい？」

どんだけファンタジアス

な展開なんだよ、

と彼は苦笑する。そんな事はありません。ありませんから、

瑠璃の友達か、

なんて現実逃避を脳内で

考えてしまう。

これは夢なんじゃないかと思ってしまうが、

先程のダメージが、これを幻想ではないと、改めて

再認識させる。

彼女はずっとこちらを

凝視している。

引き戸を開けて一分、
脳内では充分時間が経過。そして脳は結論を出す。現実には現実の
対処をすればいい、と。
だから恐れず、桐人は
質問をした。

「で、この神主に用があるの？」

桐人は自分に驚いた。

なんせ、こんな怪しさ満点の巫女さんに、自分はまるで普通に話かけたのだ。

しかし、ここで言葉が返ってこなければ、この場は一瞬にしてシラケる。だが、

「まあ、そういう事だ」

そんな予想とは裏腹に、声はきちんと返ってきた。
桐人は、ここで止めようとしたが、まだ話してみる事にした。

「で、神主の所に案内して欲しいと？」

「そういうことだ」

と、少女はポツリと答えた。やはりそうだったらしい。だから桐人は、

「じゃ、桐嘉ジジイのトコに案内してやる」

なんて言った。

いや、言ってしまった。

言った後で考える。

もしジジイにこの子を見せたらどうなるのか、

血の気が瞬時に引く。

引いてから、やっと

気づく。

（絶対に厄介事になる）

だから、慌てて訂正する事でなんとかごまかす。

「あ、やっぱり桐嘉爺は

今日は家に居な」

しかし、その言葉に、

目の前の巫女さんは、

明らかに不審そうな表情を浮かべた。

マズイ、そう悟った。

そして、巫女さんの口が開いた。

「何を言う、我は桐人と

言う者に会いに来たのだ、桐人に」

世界が、桐人の中でぐらりと揺れた。

「は、ははは は」

俺に用？

は、何なのコレ？

神様が降臨？

奉られた神を守護する？

淀みない疑問の嵐が

彼を飲み込む。

正直、もうこれが、
凡人の限界だった。

桐人は、その場で立ち尽くし、そして、

バタリ

と、柱のように倒れた。
意識が薄くなつていく

のが簡単に分かる。

視界は徐々に黒色に

塗り潰されていく。

そんな淀んだ意識の中、

その巫女の姿だけが目に映っていた。

そして、今度こそ本当に

彼は意識を失った。

第3話 「堕ちた信仰」 (前書き)

更新遅れてすみません。

アクセス数次第で打ち切りにしようかと考えていました？

目指せ10000アクセス

でも無理かもしれないです

第3話 「堕ちた信仰」

頭が痛む

まるで鈍器か何かで

殴られたような衝撃を

頭に喰らった。

ジンジンと、

闇が支配するその中、

それが痛みというカタチで襲いかかる。

イライラと、

正直、嫌気がさした。

が、その刹那

ふいに視界に光が現れる。その光を追う、

そして

「う、うう………」

漫画がごちゃごちゃと

散乱している、いかにも

ダメ学生らしい部屋の中央で、桐人はゆっくりと

瞼を開く。

蛍光灯の光に、一瞬の痛みを感じたが、すぐに視界は元に戻った。

まだクラクラする頭を押さえ、今の状況を確認する。

（寝てたのか、オレ？）

重い体を起こしながら、

彼は今までの事を思い出そうと、記憶を辿りながら、回想する。

（家に帰って、クソジジイと口論になって、それから部屋に入っ

)

そこで、急に思考が氷のように凍結した。

(部屋に)

そこまで来て、ようやく

あの異常を思い出す。

巫女、

その言葉が浮かび、

瞬時的に恐怖に陥る。

幽霊なんてモノでなく、

人間でもなさそうな気配、それが彼を恐怖に陥れた。未知との遭遇、
とも

言えたそれを思い出し、

彼は思わず呟く。

「あいつ、怪物か？」

そんな言葉を呟いた矢先の事だった。

ゴン、と。

頭に衝撃が走る。

そして、

「怪物とは失敬な！」

確かに聞こえた。

怒り収まらぬ少女の声。あの澄んだ声。

だから叫ぶ。

「うわあああっ!?!」

未知に対しての恐怖が

驚きとなって口から出た。後ろを、音速の如き速さで振り向く。

そこには居た。

あの巫女が

危ない巫女装束に

見慣れない髪結び。

後ろ髪を一本に纏めた

姿が、幼くも凜とした

オーラを放っていた。

「神を目の前にして

未だ化け物扱いか。お前、それで後継ぎになるつもりなのか?」

その言葉に更に驚く。

驚き、ある単語に気づく。

(後継ぎ、だと?)

何か、言い知れぬ恐怖を

桐人は感じた。ただでさえ得体の知れない奇妙なヤツがいるというのに、

(何でその事を)

そんな考えが頭に浮かぶ。しかし、今はそれよりも、この状況をどうにか打破すべきだと彼は考えた。

「あの、君は・・・？」

「私は神だ」

即答。

凄まじい言葉を即答されてしまった。

「何処の？」

「この地の、だ」

会話をしている頭がおかしくなる。

だが桐人は更に聞く。

「で、誰に何の用？」

その言葉に、ついに少女の表情が、まるで雪崩のように崩れた。そして、その部屋に、お怒り中の巫女さんの声が響いた。

「お前！私の話を聞いてなかったのか！？」

だ、か、ら、お前を立派な神主として教育するためにわざわざ起き

て来てやったのだ!」

「はあ　　!!!?」

思わず叫んでしまった。

あまりにもイキナリすぎ

だろ、この展開!と、

桐人は思う。

俺はついに頭がおかしく

なっちまったか?

なんて考えすら浮かんで

てしまった。

そんな桐人の思いなど

いざ知らず、目の前の巫女は話を続ける。

「だいたい、お前はまた

名乗りすらしてないでは

ないか」

「お前も名乗ってねえじゃねーか」

「うるさい、口答えをするなっ!」

この餓鬼・・・と

桐人は怒りを我慢する。

だいたいこの餓鬼は何なのだろうか、勝手に部屋にいるわ、

餓鬼のクセに俺を家来みたいに扱っわ、神だとか言っわ、一体何し

たいんだよ、と桐人は怒りを頭に募らせていた。

だから反論する。

「うるせーよ！

俺はガキのボディガードじゃねえんだよ！！」

「なんじゃ、それは？

ぼでいがあど？」

「くっ……」

このガキはそんなことも

知らんのかい！と、桐人は心の中で言う。

「お前なあ、だいたいガキのくせに生意気なんだよ。てかどけよ！俺は宿題を

明々後日までに、しなきゃならねえんだ」

「どかぬ。お前がどけ」

ブチリ、と頭の中の何かが切れる音が聞こえた。

「……っ、テメエには少し、歳の差ってやつを
教えなきゃいけないみたいだな……」

そう言っつて桐人は、まるで犯罪者のような表情で、今にも掴み掛からんとする構えをとる。

端からみれば、ロリコンの誘拐犯に見えるそれだが、桐人はそんな事お構い無しで構える。

「だいたい、俺は神社の

後継ぎなんてする気はないんだよ……！」

幼い子供ほど、アニメやヒーローの真似をする。これで逃げてくれれば、自分は晴れて自由の身になれる、と桐人は考えた。多少大人気ないが、こちらも宿題があるんだ。！と、桐人は言い聞かせる。そして、まさに踏み出そうとした時だった。

（ なっ・・・！ ）

少女は今にも泣き出しそうな表情になっていた。

「え」

正直、予想外の出来事に、桐人は動揺してしまった。脅して逃がすつもりが、先に泣かせてしまった。

「・・・そうか、」

その言葉に、まるで針で刺されたかのような感触を受ける。

「あの、今の冗談」

遅い。

そう分かっていても、言ってしまう。

罪悪感が体を埋め尽くし、自分を責めた。

だからこそ、次の少女の言葉に驚く。

「お前も、私を忘れてしまったのだな」

愕然として、その言葉を聞いていた。

（お前も　　？）

「分かっていたのだ。私など、とうの昔に忘れさられている事ぐらい」

耳に声が留まる。

その言葉を否定できない。別に哀れだと思ったからではない。

その表情に、本当の悲しみが宿っていたから、否定できなかった。しかし、

「神の資格はない、か。」

私は神主にすら忘れられていたのだからな。

それに、神主に見捨てられてしまった」

ドクリ、と心臓が唸る。

神主　　。

それは本来桐人が引き継ぐべき仕事。

奉られし神を守護し、

神を奉る者を言う。

もう疑う所はなかった。

今まで霊という存在を
相手にしてきたのだ。

だから、神様だろうと

それは例外ではない。だが、もし目の前の巫女が本当にこの神社に
奉られた神だとしたら、

彼女はどれほどショックをうけただろうか。

神主になる（予定）の男に継ぐ気はない、などと言われたら……

自分ならどうするだろう、そう考えただけでも
自分を責めたかった。

「すまぬ、私はやはり、
勝手すぎるな……」

かける言葉を必死に探す。一体何を言えば、
この空しい空間を元に
戻す事が出来るのか。

あの巫女の事を自分は全く知らない。
知らないからこそ

（？）

そんな屁理屈じみた考えに入ろうとした時だった。

「え………？」少女は消えていた

まるで空気のように、

桐人の前から、いつのまにか消え失せていた。

別に気を取られていたワケではないが、足音すら
聞き逃すほどの考え事を

していた覚えもない。

ただ、忽然と姿を消していた。

本当に最初から、まるでいなかったかのごとく、桐人には、今の出来事が夢に見えた。何も、できなかった。

「クソっ……！」

今から追いかけるとして、見つける確率は低い。

家族に見つかり、騒ぎを

起こされたら

そこまで考えて、彼は

忘れていた大事な事を

思い出す。

（やばっ　もし、あの

クソジジイに見つかりでもしたら

）

彼の祖父は、その老体からは考えられないような能力を所持している。

前に一度、神社の寶錢箱

から、金銭を盗もうとする輩が来たのだが、運悪く

祖父に見つかってしまい、ギタギタにされたという。そんな恐ろし

いやつが、

家に見知らぬ泣く少女を

発見したら

昔から正義感が強い祖父はまず泣く少女を保護。

誰が泣かしたか聞き込み

少女が俺の事を言う

俺の死亡フラグ成立

「っ、ちきしょう!!」

桐人はそう言って、
時計を見る。

時刻は午前2時、
どんだけ寝てたんだよ俺、なんて桐人は思いながら
部屋を飛び出す。

時間的には家族は誰ひとり起きてないだろうが、

祖父は例外だ。

祖父は寝ぼけて

見回りするクセがある。

見つけた場合は何が

起きるか想定できない。

それに、こんな時間だ。

不審者に遭遇して誘拐

されてもおかしくはない。

桐人は急ぎ、玄関を

飛び出した。

「クソ、何だつてあのガキに俺はこんなに必死に
なってたんだ……!!」

そう言って、桐人は神社
の方向へ駆け出した。

「哀れだなー」

闇夜に紛れ、男は呟く。

「信仰を失った神など、
所詮は墮神と変わらねえ
っていつものに」

八倉家の家の屋根、
その頂点に男がいた。

男の目には、神社に向かって走って行く少年の姿が
映る。

そして一人つぶやいた。

凜猛な笑顔で。

「今夜は面白い夜になるかもしれないな……」

そう言つて、男は懐から

小刀を取り出した。

そして、

「なんせ、今日から俺が
ここの神になるかもしれ
ねえんだからよ！」

天に向かい、咆哮した。

この時、桐人はまだ
知らなかった。

このあと、一体何が起こるのかということ。・・・。

第4話 「繋がれた手」

夜の神社はこんなにも
不気味だったのか、
と八倉桐人は心の中で
密かに驚きながら、
急ぎ神社へと向かう。

「俺の勘が正しければ」

砂利の音が、冷えた闇夜に静かに木霊する。
それは、呼吸と同じリズムで奏でられる。
ただ静かなだけの夜に、
それだけが響き渡る。

「奴は本殿にいる」

彼の行動の起点はただ
一つ。

少女を見捨てたくない、
そう思ったからだ。

誰しも見捨てられたのなら相当ショックを受けるはずである。

幼い頃から霊を、
この世に未練を残した者達を相手にしてきた桐人だからこそ分かる
気持ち。

神だろうと人間だろうと
関係ない。

本当に彼女を見捨てたくなかったから、桐人はこんなにも必死にな
っていた。

(神だというのなら、
本殿にいるはず・・・)

考え無しに走り出して

一分、

ついに目的の場所に桐人はたどり着く。
見えたのは、巨大な神社の屋根だった。

厄埜神社

暗闇にありながらも、

その存在は決して薄れる事はない。

昼間とは違う雰囲気に、

彼は思わず生唾を飲み込んでいた。

古くから存在する神社、

という事しか彼は知らないのだが、幼少の頃、

ここで何度も遊んで、

辛い時はここに籠っていた彼にとっては、最高の空間だった。

懐かしい、とさえ感じる

その場所も、今はまるで

別の場所にさえ感じる。

神の奉られし場所

そんな感じしかしないのはきっとあの少女との出会いがあったから
だろう。

周囲にそびえ立つ木々の

影が、まるで神を守護する屈強な兵士にも見える。

まるで監視されている様な気分に、思わず彼は進むのを躊躇った。
それでも彼は再び歩く。

(今更、未知の世界だか何だか知らねえけど、)

一步、また一步と。

まるで真実へと近づくかの様に進む。

(それでも信じるしかねえよな……)

ついに寶錢箱の近くまで

たどり着く。

(信じてくれていた奴を
信じないなんて)

そして、南京錠の鍵を外し大きな木製の引き戸に
手をかける。

そして、

「そんな事が許されるわけ無えだろ!!」

声と同時に、引き戸を力の限り開ける。

ゴゴゴゴゴゴ……と

低い音が、広い本殿の中に響き渡った。

割と乾燥している本殿の中で、埃が舞うのも構わずに桐人は、ずつ
と、ある場所を見つめていた。

そこは、神が奉られている小さな祠があった。

そして、

そこには

巫女装束の少女がいた。

換気孔から入ってくる
月の光が、その全貌を
静かに照らす。

あの時、危なっかしい
巫女服だと思っていた
ソレも、今では普通だと
さえ感じてしまう。

あの後ろに束ねた髪が、
それをさらに引き出す。

白銀の神に澄んだ蒼い瞳。神々しいと、桐人は初めてそんな目で少女を見た。

しばらくの沈黙の後、

少女はこちらに気付いたのか、手で「閉める」と合図を送ってきた。

桐人は、従うままに引き戸を閉め、そのまま歩み寄ろうとした。
だが、

「待て

」

まるで空気を両断するかのような声に、思わず桐人は歩みを止めた。
それを見て、少女は口を
開いた。

「何をしに来た？」

無駄のない澄んだ声。

もうこの時点で彼は確信

していた。

“彼女は本物の神”だと。疑いなど、もはやバカらしいとさえ感じる。なぜなら、彼は彼女を信じているからである。

「お前を、信じてやる」

「それだけか？」告げた言葉は真実。わかってもらおうなどとは最初から考えてない。

「私の何を信じる？」

冷気を帯びたような声が本殿に響き渡る。

それでも桐人は答えた。

「お前の存在を、だ」

その言葉を放った瞬間、少女は少し驚いた表情でこちらを向いた。

先程まで凍っていた空気が少し変わった。

「な、何を言っ

「気が変わったんだよ」

少女が言葉を言い終わる前に、桐人が切り出す。

「確かに、神だとか神主
だとか、今でも頭の中が
状況把握が出来ねえ状態
だよ」

その言葉に、少女が少し
ムツとした表情になる。
しかし、桐人は続けた。

「でもな、俺は俺を信じてくれる奴を信じてやらないほどバカ
じゃねえぞ」

「なっ……!!」

その言葉に、少女は頬を
紅潮させる。

そして、
今まで抑えていたモノを
吐き出すかのように、桐人に向かって少女は言い放った。

「だがお前は、神社の
後継ぎなどしないと云ってたではないか!」

少女の表情が崩れる。

しかし、それに対して
桐人は、その言葉を黙って聞いていた。
の神は、人間相手に本気で訴える。
そこで桐人は突然口を開いた。

「だから、最後の賭けで

俺の前に姿を現して、俺が神主にならない、なんて言ったから、絶望してここに来たというのか？」

本的を射たような言葉が本殿に響く。

その言葉に、少女は

「……………うむ」

と、まるで起こられた子供のようにか弱く答える。

「っ、全く……………」

だから桐人は、今度こそ言っただけだった。

「お前は全然神らしくないじゃないか……………」

「えっ……………」

彼の意外な言葉に、少女は思わず驚愕の表情を浮かべる。そして彼は続けた。

「俺はな、まだ神主にならないなんて決めてない。

それに

「そこまで言っただけで間を

置いて、彼は言い放つ。

「俺を神主にしたいのならお前が俺を説得すればいいじゃないか」

「っ！」

それは一撃で少女の表情を崩させた。
もう、最初のピリピリした空気は無くなっていた。

静かな時が流れる。

月明かりに照らされた、
神社に奉られし神は、目に涙を浮かべていた。

「・・・まだ、私は信仰を失ってなどいなかったのだな・・・」

そんな目の前にいる、

“神らしくない”神様に

向かって桐人は優しく言っただけのことにした。

「当たり前だ」

暖かな空気が周囲を包む。そんな感じが、桐人には
懐かしく思えた。

少女は、涙を拭くと、
平凡な人間に歩み寄る。

そして、手を差し延べて
から

「ならば私は、神の名に

かけて、神主の素晴らしさを教え、お前を必ずや立派な神主になる

よう教育してやるっ」
それを見て、桐人も手を
差し出す。

「本当にお前、神らしく
ないな……」
すぐに泣くし……」

「う、うるさい!!」

桐人の足に蹴りが入る。

「痛っ!!」

「お前が悪い!!」

足を抑えながら、桐人は
言葉を続けた。

「ま、俺を神主にしたい
のなら、せいぜい頑張っ
て俺に認めてもらえるよ
うに努力する事だ」

「わかつている」

そして、二人の手は固く
結ばれた。

これから、同じ道を歩んで
いくかのようだ。

「ほら、ちっさと離せ」

「はいはい、」

サツと、少女は手を引つ込める。
そんな様子を見て、桐人はある事に気づいた。

「そっぴや、お前つて、
名前は何ていうの？」

「いまさら聞くのか？」

「お前を神様だなんて
呼びたくないしな」

むう、と少女は頬を膨らませる。

「私を馬鹿にするな！」

「してない　　つて

いきなり蹴るなよ！」

「うるさい…！」

そう言つて、少女は少し
間を置いた。
そして、決意したような
表情で言う。

「私は紗夜^{サヨ}、だ」

恥ずかしそうに俯きながら話す様は、そこいらの少女と何も変わら

ない。

「案外、神様って名前があるんだ……」桐人は、感心したと言わんばかりの表情で頷く。

「当たり前だ

お前も、九十九神とか、

聞いた事あるだろう？」桐人は、あまりこつこつという類のモノには知識がない。

神社の後継ぎという事だけが関係していた。

「へえ」。でも、お前の

名前って、案外普通の名前なんだな。もつとこつ、

“く神”みたいな名前かと思った」

その桐人の正直な感想に、何故か紗夜は切ない表情を浮かべる。

端から見れば、まるで大切な者を思い出しているような表情だった。

「それは

」

紗夜は一息置いて、その感想に答えた。

「人から貰った名だ」

「なっ……！！」それを聞いて、桐人は驚愕の表情を浮かべる。桐人の様子を見て、サヨはため息混じりに語りはじめた。

「もう何百年前の事だ。」

私は、ずっとこの神社に
籠りながら、この地を長く守護していた。正直、そんな物に飽きて
いた私は、
ある日、久しぶりにも本殿を抜け出す事にした」

どこか遠くを見つめながら語る紗夜は、急にクスリと笑って桐人へ
振り向く。

「そして偶然出会った。
お前みたい奴とな。」

そして、名前を貰ったのだ」

「お前が見える、という
ことは、ソイツも幽霊が
見えるってワケ？」

「いや、その時私は肉体の具現化により、人間として一時的に蘇っ
ていた」

「は？具現化？

……何それ？」

聞いた事がない言葉に、
桐人は思わず困惑する。

「具現化とは、本来この世で肉体が死滅してしまった者の魂から情
報を抜き出し擬似的に肉体を再現する事をいう。つまりは、」

ゴクリと、桐人はその先にある、非日常の言葉を
生唾を飲み込んで待つ。

「魂から肉体を再構築し、それに、魂を入り込ませる事で、蘇生という事柄を再現する、それが具現化というものだ」

難しい単語に、桐人は頭が回らなくなる。

それは、常人が聞いた所で理解できぬモノだったが、信じる、と言った以上は信じなければならぬ。

「で、今のお前はまさにその状況にある、と？」 「まあ、そういう事だ」

「はあ・・・成る程」 桐人は半分理解した形で聞くのを止めた。

「しかし本来、具現化を行う際は莫大な精神を消費する。あまり使用はできない代物なのだ」

「なんか面倒だな、神の力ってやつは」

そんな感想を桐人が漏らした矢先のことだった。ふいに紗夜が、小さく笑って言った。

「だが、私はこれを無制限に使用する事が出来る」

「な、なんだそりゃ？」

いくらなんでも反」

「ほれ」

桐人が言い終わる前に、

紗夜は、ある物を桐人の

目の前に突き出した。

そんな紗夜の手握られていたのは、翡翠色の勾玉だった。

「なんだ、コレ？」

「靈翠珠、という」

「れ、れいすいじゅ？」

明らかに聞き慣れない名前に、桐人は困惑する。

「これこそ、我が神器の

一つだ」

その自慢げな紗夜の説明と共に、勾玉が輝く。

「神器って一体何だ？」

「神が各々持つ、ある特殊な力を齎す宝具の事だ」

外に向かいながら、紗夜は説明を始める。

「神は、それぞれ三つの

神器を持ち、それぞれの
地を治めるために力を行使する」

紗夜は人差し指を立て、

「その土地を栄えさせたりあるいは外敵から土地を
守護したりする

「でも外敵って、所詮は
人間相手なんだろ？」

そんな力を使わなくても
いいんじゃないか？」

その桐人の質問に、紗夜は溜め息で返した。

「まあ待て。何も敵とは 人間だけではない」

「な、なんだと？」

あまりにも突拍子もない
回答に、桐人は拍子抜け
した。

「この世には、私のような土地神をはじめ、様々な神が存在する。
しかし、大抵は互いに干渉する事は、まず無い」

「じゃあ、何が敵だと
いうんだ？」

桐人が、本殿の引き戸を

閉めながら問う。

「この世に神で在りながら愚行を働き、神の座から墮ちた神、」

そう言つて、紗夜は桐人を見つめて続けた。

「すなわち、墮神」

「おち、がみ？」

二回目の意味不明な単語に桐人は戸惑う。

「奴らは、神の座に再び

昇るがために、他の神の土地を荒らし、その神を殺しに来る」

「最低だな、ソイツ」

桐人は未だに一般人の考えで感想を述べた。

「だから、神は神器を手にするのだ。

・・・理解したか？」

「そこそこ、かな」

いきなりの非日常に、

桐人は半分呆れたような表情で答えるのだった。

未だ風が靡く真夜中、
八倉家を目指しながら
桐人と紗夜は、夜道を歩いていた。

周囲を木々が囲む中、二人は会話する。

「そういえば、私はお前を“桐人”という呼び方で
呼べばいいのか？」

「まあ、その方が分かりやすいしな」

「桐人……か。
いい名だ……」

「そりゃあどうも」

桐人は苦笑いしながら
言った。

「で、お前はこれから
どうするの？」

その質問に、紗夜はしばし考えながら宙を見つめる。八倉家の、ま
るで小さな
運動会が開けそうなくらいの広さを誇る庭に差し掛かった時、紗夜
はやっと
返事を返した。

「久々の身体だから、
寝てみたいな……」

そんな睡眠願望を持つ神様をよそに、桐人は一人、
脳をフル回転させていた。

（うわ、家の事を忘れてた
よ、俺っ……！！）

彼の家族の内、約一名が
とても気になる。

（なんて言い訳すりゃ、
あのジジイを回避できる
んだよ　　）

まあ、とりあえず瑠璃に
話をつけてから
なんて考えてる最中、

「やはり、毛布がよいな、
いや、絹布団も　　」

横にいる少女の贅沢な悩みにも、彼は呆れていた。

「あのな、お前は今日は
物置に寝てる」

「な、なにを言う！？
私は温かな毛布で一夜を
過ごすつもりだぞ！」

「じゃあ布団やるから別の部屋で寝ろ」

「神主の側を迂闊に離れる事はできぬ　　！」

「俺の部屋はな、そんなに広くもなければ、二人分の布団を敷くスペースもねえんだよ！」

「ならば二人、同じ毛布で寝ればよからう！」

「なっ……！！！」

一瞬、桐人の時が止まる。

「なんだ、どうした？」

自分の顔が紅潮していくのが彼には分かっていた。

「な、なんでもねえよ」

そう言っつて、桐人はあらぬ方向を向いた。

（だいたい、恥ずかしくはないのかアイツは……？あんな露出度満点の巫女服なんかで一緒に寝たら！）

桐人は、そこまで言っつて自分が、あともう少しで

ロリコンへと変貌する直前だった事に気づく。

そして、ふと紗夜の方を

見た。

「なっ……！！」

紗夜は、桐人を見つめて
ニヤけていた。

「成る程、そういう事か。別に私は気に

「俺が気にすんだよ！」

桐人は恥ずかしくて、
思わず大声で叫ぶ。

それを見て、笑いながら
紗夜は言った。

「冗談だ、気にするな。」

大体私は、夜中に墮神どもが

そこまで紗夜が言いかけたその時だった。

「襲ってくるかも知れねえから、一緒に寝るってか？神様と神主っ
てのは随分と仲良いんだなア！！！」

突如として狂ったような声が聞こえる。

「ッ
！？」

まるで錘で体を埋められた埋め尽くされたかの様に、ドツ、と空気が重くなる。桐人はそんな感覚に思わずその場で固まった。

それは紗夜も同じらしく、驚愕の表情を浮かべた。

そんな、重圧で狂った声の持ち主は、桐人の目の前にいつの間にか立っていた。ドス黒い装束に、茶色の

ボサボサヘアー。

どう見ても成人式で大暴れしてきたヤンキーのような男の手には、サイズが異常なまでに巨大な釘バットが握られていた。

そして、ヤンキー男は

二人の前で告げた。

「今日から俺が、ここに

奉られる神だ！

お前らには恨みはねえが、ここで死んでもらうぜ！

土地神サマよおー！！」

長い夜は、まだ一日を終了させてはくれなかった。

第5話 「偽られた名」

冷たい夜風が吹く中、
八倉家の広大な庭に、三つの人影があつた。
そこには桐人と、あと二人の“神”がそこにいた。

「 墮神っ！」

紗夜は驚愕の表情で
叫ぶ。その瞳には、僅かに動揺が見てとれた。
そんな紗夜の焦った表情に桐人は、数分前の出来事を鮮明に思い出していた。

『 神の座から追放されし、自分の領域を持たぬ神』

あの本殿での会話。

桐人は、彼女の言葉を

半信半疑で聞いていた事を今さら後悔した。

(コイツが、墮神 ！)

再び現れた怪異に、

目の前の男の存在が、

まるで悪魔か何かのように彼には見えた。

そんな、黒装束に身を

包んだ男は、手にした

釘バットを振り上げながら口を開く。

「 分かんたる……？」

墮神の俺様が何故この場にいるのかぐらい……」

墮神と名乗った男を前に
して、紗夜は怒りの目線でその男を睨みつけ、静かに答える。

「私の不完全な覚醒状態を狙って来た　　という事が・・・」

「

「その通りイ!

お前らがこうして隙を見せるのをずっと待っていた
んだよ　　!」

男は、バットを紗夜に向けると、言い放った。

「俺様が土地神の座に
上がるためになア!」

刹那、ダン!という地面を蹴る音と共に、男は一瞬で桐人との間を
詰める。

「　　っ!?!」

桐人が構えようとした時、既に男は彼の目前にいた。冷や汗が、背
筋を走る。

「遅いんだよ、雑魚め」
ドン、と桐人の鳩尾に強力な蹴りが入る。

「　　うあッ!!」

一瞬、視界がぶれたかと

思うと、彼は妙な浮遊感に襲われ、そして、そのまま桐人は、勢いよく砂利の地面を転がった。

「桐人っ！！」

紗夜はその時、初めて桐人を名前で呼んだ。だが、自体はそれほど容易ではない。

黒装束の男は、すぐに紗夜に詰め寄った。

「お前、よくも桐」

「うっせえんだよガキ」

ガシッ、と紗夜は巫女服の襟首を掴まれる。

「な、何をする！」

は、離せっ、愚か者！」

バタバタと暴れる紗夜をまるで子猫でもつまみ上げるように、男は愉快そうな表情を浮かべながら紗夜を引き上げる。

「さ、紗夜っ！！」

起き上がりながら桐人は、前方を見つめる。

目の前には、人質のように身動きを封じられた紗夜がいた。途端に、怒りが内部から

沸き起こる。

「お前・・・ソイツを
離せっ！」

「はあ？なに寝ぼけた事を抜かしてんだ、てめえは？離してどっす
んだ？」

桐人を嘲笑いながら、男は紗夜の首を締め付ける。

「ぐうあ・・・あ・・・
はな・・・せっ・・・」

「はははははっ！
可愛いねエ！その表情、
マジで嫌いじゃないぜ」

愉快そうに、弱き者を
痛め付けるかのように、
男は大声で笑った。

「ソイツを、離せと
言っているだろ！」

先程の一撃を、鳩尾に
もろに喰らって、あと少しで意識が途切れてしまっ所まで追いやら
れた彼だが、痛みを堪え、それでも
目の前の強大な敵に対して立ち上がる。

「へえ、中々やるな。」

今ので肋を全て砕いたハズだったんだが、どうやら

外したみてえだな」

男はそう言って、あの釘バットのような物を桐人に向けた。

それはよく見ると、釘ではなく、小さな無数の突起がバットを一面を覆っておりバットと言うよりは、

昔話とかに出てくる、鬼のこん棒のようだった。

「だがどっちにしろ、人間が神に勝とうなんて馬鹿な考えは捨てる」

男はまるで幼い子供を諭すかのように桐人に言う。

「うるさい、お前が勝手に勝利を決める権利はない！俺を倒してからにしろ」

「はははっ！こいつは面白れえ！人間風情が、神に勝つだど？ふざけるのもいい加減にしろ人間！」

そう咆哮し、男は即座にバッドを振りかざして、

「弾け、逆魔の拷鉄！」

男が叫んだ、その時 桐人の足元の砂利が一齐に弾け、飛び交った。

「っ！？」

咄嗟にそれを腕で塞ぐ。

しかし、凄まじい速度で

弾ける砂利は、桐人の腕に深く突き刺さった。
又チャリと、腕から血が
こぼれ出る。

彼は何が起きたのか、全くわからなかった。

常人には理解できない力が目の前に君臨していた。

「・・・なんだよ、今の
ヤツ・・・」

地雷を踏んだかのような
衝撃に、桐人は思わず
その場に膝をつく。

「桐人っ・・・!」

男に首元を掴まれた紗夜が悲痛な声をあげる。

「だから言つたろ、所詮
人間のテメエが、神である俺に勝つなんてありえないってさ」

そう言つて、男はケラケラと笑う。

「・・・クソ・・・!」

桐人は、小さく悔しさを
吐露していた。

静まり返った宵闇の中、

様子を見ていた男が、ふいに口を開いた。

「おい人間、お前が生き残りたいと言うのなら、一つだけ妙案があるぜ」そんな敵からの誘いに、桐人と紗夜が同時に反応を示した。

「なん・・・だと？」

桐人が半ば疲れた表情で頭を上げる。

「だから、今から条件を話してやる。それを呑んでくれるならの話だな」

ゴクリ、と咽が音を出す。生き残りたい、そんな欲望が桐人の中で形成された。それは、人として当たり前前の欲望だった。そして、ついに男が口を開いた。

「俺を、ここの神社に奉るって言うんなら、テメエの命は助けてやる」

「なっ・・・!!」

痛みに似た何かが、頭を襲った。

もちろん、桐人は驚いた

表情を浮かべていたが、
紗夜はそれより酷い表情
だった。

「それは……」「嫌だ、とは言わせねえ。それにさ、お前・
」

男はニタリと笑うと、
はつきり聞こえるような声で言い放った。

「コイツの正体を知ってんのかよ？」

「っ！」

その発言にいち早く反応
したのは紗夜の方だった。理解できない話に、桐人は思わず男に尋
ねる。

「正体って、ソイツは
土地神なんじゃ」

「だが実際は分からないんだろ？ はたしてそれが、
真実なのかってのはさ」

そして男はニタニタしながら、手元の神様少女を凝視して、続ける。

「そうか、お前はなんにも聞かされてねえんだな、
……つたく、あんま人の悪口は言いたくねえが、
自分のためだ……教えてやる。……コイツがどんな奴なの
かをな」

「貴様つ、やめろ!!」

そんな男の言葉に、紗夜はこれまでにないほどの形相で抵抗し始めた。

首を掴む男の手を、必死に払おうとするも、頑丈な男の手は岩山のように硬く、紗夜の細い手では動かす事など無理だった。そんな様を見た男は、嘲りけを混ぜて言う。

「おうおう、自分の正体バレルのがそんなに怖いのかい？ だったら恐怖を感じる前にバラしてやつから安心しろ!!」

男はそう言い、紗夜を前に突き出した。

「……こいつはなあ、なんと……!!」

「やめろ　　っ!!」

紗夜が、悲鳴を上げた。そんな様を見ていた桐人は生唾をゴクリと飲み込む。得体の知れない世界が、彼に迫っていた。

知りたい、知りたいけど
知りたくない。

そんな、葛藤する桐人に
トドメの言葉を男は平気で放った。

「こいつは、人を何人も
殺してきたなあ
疫病神なんだよ!!」

「・・・・・・・・・・」

桐人は、何を言われたのかしばらく分からなかった。だが、次第に
それが耳を
伝って脳に届く。

そして理解した。

「・・・・・・・・・・へ？」

「ハハハッ、ハハハ！」

乾いた狂笑が、一際寂しい闇夜に轟く。

桐人の世界は、またその時ぐるりと一変した。

月が、静かに空を舞う夜にしては、あまりにも不釣り合いな状況だ
った。

第6話 「裏切り神主」

闇が支配する夜の庭で、
男の狂笑が響き渡る。

全てを嘲笑うかの如く、
その声は天すら貫き、
風の音を完膚なきまでに
覆い尽くしていた。

八倉桐人は、そんな狂笑の主を前に、呆然とする。

「嘘、だろ？」

「現実だ、人間」

男がケラケラと笑いながら桐人に告げた。

男は、今まで掴んでいた
紗夜を解放する。

すぐに男から距離をとった彼女だったが、自由を取り戻したのもつ
かの間、
すぐに桐人の痛い視線が
襲ってきた。

桐人は紗夜を見つめる。
それに気付いた紗夜は、
一瞬にして俯いてしまう。しかしその仕草は、同時に事実であると

いうことの

証明になってしまった。

不快な何かが、桐人の胸中で踊り狂う。

「俺に、隠してやがった
のか……?」

冷たい声が、紗夜の心を
貫いた。

「ち、違う！ 私は決して
隠そうなどとは　！」

「知られたら人殺しってということがばれるからだろ?……凶悪な
神様よお」

そんな、もはや普通の少女と化した紗夜の弁解は、
男の声により阻まれた。

「ほ、本当だ！本当に、
……私はっ……!」

少女は、今にも泣きそうな顔で、それでも必死に
否定した。

だが、

「もういい　」

「っ……!」

桐人がふいに声を上げた。紗夜は、それを聞いた瞬間力無く地面に膝をつく。
拒絶されてしまった。もう終わった
そう、紗夜は思った。
そうして、桐人は男に
近づきながら、決定的な
言葉を放った。

「墮神、お前の話に乗ってやる……」

「ふはは！やはり死が怖いのか、人間」

それを聞いて、男は桐人に歩み寄る。

そんな会話を聞いていた

紗夜は、頬に涙を流す。

全てが絶望へと変色して

いく感覚、できれば二度と味わいたくなかったそれが今まさに少女の目前で繰り広げられる。

『疫病神のせい』

『あんな汚らわしい者を
なぜ土地神にした？』

『不作もヤツの仕業か』

過去に言われつづけた言葉が蘇る。

恨まれ憎まれ、そうやって長い時を永遠にも等しい

時を彷徨ってきた。

辛くて、泣いた。

その繰り返しがついに

目の前で終焉を迎えようとしていた。

だが、少女は嬉しく思う。そんな時を、ただ僅かな

時間であっても一緒に居てくれた者がいた。

たとえ裏切りを受けても、それは過去の罪の報いを受けているのだと紗夜は心の中で考えていた。信じてくれた。

ただそれだけで感謝をしなくなった。

だから紗夜は、

「桐人、最期の願いを

聞いてくれないか？」

今や自分を消す事に

賛同している人間に向かい言った。

「聞く気はない……」

「……そう、か」

あっさり拒絶される。

でもそれでよかった。

迷われたらどうするべきか分からなくなる。

たかが一日の出会いだ。

特別な存在というわけでもない。

嫌われたのなら構わない。何故なら、自分は犯してはいけない大罪を背負って

いるのだから。

「ヒュー！クールだねえ、嫌ったからと言って、そこまで酷く言う事はねエ。」

「ま、嫌われて当然なヤツだがよ」
そんな言葉が聞きたくなくても紗夜の耳に入った。

「まあ、そんなヤツだとは思っていなかったがな」

桐人はそう言つて、男に
手を差し延べる。

「ん？なんの真似だ？」

「ま、挨拶みたいなもん
だな。これが俺の流儀つてやつさ」

桐人は、先程の紗夜との
握手の時のような笑顔を
みせた。

「桐人……………」

悲痛な声が、桐人を直撃
する。

そんな声に、桐人は紗夜へ振り返った。

「なんだよ……………」

今しかない、そう紗夜は

思った。だから・・・

「ありがとう・・・」

「・・・・・・・・」

聞いた言葉に、桐人は返答をしなかったが、その顔はどこか、哀れんでいるかのように見えた。

桐人は、男に向き直ると

再び握手を要請した。

「仕方ねえ。まあ奉られるんだから文句は言えねえ
しな・・・・・・・・」

そう言って、男は手を差し延べる。

「お前、左利きか？」

「ああ、そうだ。

なにか問題あるか？」

「別に・・・・・・・・」

そうして、握手の時間が
ついに来た。そして、

「ま、ヨロシク」

男が、桐人の左手を握る。桐人も男の手を握り、

「「こちらこそ」

そう桐人が言った時、

ぐいっと、

男の身体が桐人の手により引き寄せられた。

「なっ　　!？」

驚いた男の顔面は、既に桐人の拳の前にあった。そして、

「ヨロシクう!!!」

ドシャツ!!と、桐人の

拳が、男の顔面に至近距離からヒットする。

そして、醜い表情になりながら、男は砂利の地面の上空を舞った。

刹那、地面へ激突する。

その事態に、男が驚いた

表情で、桐人を見る。だが、桐人を驚きの表情で見つめていた者は、実は

もう一人いた。

「え・・・桐人・・・？」

紗夜は、一瞬何が起きたのかわからなかった。

桐人は自分を嫌いになってそれで墮神と握手をしようとした所で、桐人が突如、ヤツを殴り飛ばし

「何のマネだ！」

「うるさい！ 残念だがお前とは仲良くなるつもりも、手を組むつもりも、最初からねえよ！！！」

その言葉が、紗夜の耳にスツと入ってくる。

「なら、俺を騙していたっていいのか！？」

「ご明答。お前に近づいたのも、握手してやったのも全て、お前のそのム力つく顔面を殴り飛ばすための演技だ……！」

その言葉が火種となって、紗夜の引き攣った身体を、まるで氷を溶かすかの様にゆっくりと、紗夜の心を安堵感が包んだ。

「テメエ！俺を利用してタダで済むと思うな！」

男は、先程と同じく即座に突撃してくる。

桐人は、あの一瞬の時に思い出し、次に何処へ来るのか予測。

今度ばかりは蹴りではなく金棒による一撃だろう。そんなモノ、喰らったら

一発であの世行きだ。
そんな考えを巡らせ、瞬時に回避行動に出る。

「粉々にしてやんよ！」

前方から、大の男が
凄まじい速度でこちらに
突撃してくる。

桐人はその場に構え、
それを見据え、そして

「これでも喰らえ！
このヤンキー野郎っ！」

ザバツ、と砂利を一蹴、
男の前で砂利が飛ぶ。

「なっ
雨を
喰らった。
！」凄まじい速度で走ってきた男は、
即座に砂利の

速度も後押ししてか、
弾丸のように襲って来た
それは、完全に男の動きと視界を封じる。

そして、

「はあああっ！！」

「
！！！？」

ドスン、と、

弾丸の雨をかい潜り、桐人の拳が男の鳩尾に深く突き刺さった。

「があはっ……!!」

男の身体が、飛散する砂利を被さりなが、その場にうずくまった。

「はあ、はあ、くそっ!!人間ごときにいつ!!」

男は、しきりに何かを

言いながらその場から動けなくなった。

それを確認してから、

桐人は忘れてはいけない

人物の方へ向く。

彼は想像した。このあとの展開を。

きつと驚いた顔をしているに違いない、と。

そして、その人物を視界に入れ

「……………」

「へっ……………」

紗夜は、思いつきり泣いていた。

涙が頬を濡らし、嗚咽を

しているせいか、その表情は、少し赤くなっていた。もちろん、予想外の出来事に、桐人は混乱する。

「あ、あの？何を泣いているのですか？」

そんな桐人の気の利かない言葉に、紗夜はついに溜め込んでいたモノを、一気にぶちまけた。

「この愚か者がっ！！！」
まるでこちらが説教を喰らっているような気分に一瞬でなってしまった。

「ああっご、ゴメン。ほら、まず敵を欺くには、まずは味方から、なんて
言うじゃあないか」

完全に焦っている桐人を前にして、ふいに紗夜がこちらに走ってきた。

(ヤバ、殺される！？)

そんな恐怖感が内心で湧き起こり、瞬時に目をつむっていた。だが、
バサリ………。

何か、温かなモノが桐人を包んだ。
血がでたのか？とも思ったが、そんな事を考える間もなく、小さな吐息が聞こえてきた。背中に回された手が、桐人の衣服をギュツと掴んだ。どうやら抱き着かれたらしい、と桐人は認識する。

「バカ者、愚か者！そんな事ぐらい先に言ってくれたっていいだろう！！」

余程不安だったのか、抱き着いて離れない。

「本当にバカ者・・・」

紗夜は、桐人の胸元で涙を流した。

「裏切りに遭うのはもう
こりこりなのだ・・・」

「悪かった。俺は裏切ったりしないから」

「絶対、だぞ？」

「ああ、約束だ」

桐人は、その頭を撫でた。端から見れば本当にただの幼い少女にか見えない。とても、神様には見えなかった。そんな事を思った矢先の事

ズドーン！！！！

そんな轟音が、確かに聞こえた。二人とも音がした方向へ振り向く。

「なっ・・・！！」

そこで目にしたモノに
呆気にとられた。

そこには、あの男がいた。しかし、服のあちこちが破け、代わりに身体が

二倍以上の大きさになっていた。しかし、もはや先程の原形を留めておらず、

筋肉だけが醜く進化していた。そして手には、先程とは比べ物にならないほどの金棒が握られている。例えるなら、鬼だった。

桐人と紗夜は、急いで

近くにあった小屋の物陰に隠れ、様子を見た。」

「テメエらああああ！

かってエエに終わった気になってンじゃネエぞ！」

「な、なんだよアレ？」

桐人は正直な感想を述べていた。しかし、そんな桐人の横に立つ少女は、

獣の咆哮の如く叫んだ化物を見て、少し難しい表情を浮かべた。

そして一言。

「あれは、神の真の姿、
いわゆる、終ノ型だ」

「お、終ノ型あ？」

「うむ。神というモノは、大抵が己が大命や使命という物のために、神器を

用いて人間や靈魂を自在に操る。だが、中には己が欲の為に力を使用する者も

いる」

そこで紗夜は一息置いて、

「その代表的な者が、ああいうタイプのヤツだ。三種の神器、全ての力を解放した姿、それが終ノ型というワケだ」

そう言うと、桐人を見て言った。

「だが、それは神の理から外れる事を意味し、神にはそんな輩をこの世から抹消しなければならぬ使命があるのだ」

「と、いうと……今からアレを倒さなきゃならないと……?」

桐人が恐る恐る紗夜に聞いた。

紗夜は桐人と目を合わせ、「そうだ」

そうアツサリと言った。

「紗夜が戦うのか?」

「私にそんな技能はないしたがってお前が戦え」

どうやら戦うのは自分であるらしい。

だが、よく考えれば、あの巨大な怪人と、拳一つで

どう渡り合えといふのか、桐人はその疑問を紗夜にぶつけた。

「拳でどう戦えと？」

その重要な質問に、

「それなら心配するな。
私の力を貸してやる」

紗夜はそう言うと、懐から何かを取り出す。
それはよく見ると、
紅色の勾玉だった。

「これは・・・？」

「いいから手に持て」

そう言われて、桐人は言われた通りにした。

「よし、次に「射る」と
いう言葉を頭で思い描けば良い・・・」

「分かった・・・」

ドオン！と爆弾にも似た
衝撃音が響く中、桐人は
そのイメージを頭に巡らせた。

（射る力、射る道具、射る為のモノ！！）

そうして、桐人は目を開けた。そして

「っ！！こいつは!?!」

「うむ、良好だ」

桐人の手には、漆黒の弓が握られていた。
月の光を受けたそれは、
美しく黒光りした。

「“神楽ノ器”それが私の第二の神器。闘う者に力を与える武神の力だ」

「す、すげえ・・・」

驚いた彼だったが、
だが、桐人はここで、ある事に気づく。

「そついや矢がなかったら意味ないんじゃ・・・」

だが、桐人のそんな常識を覆す返答が紗夜の口から語られた。

「いや、「射る」という事をするだけで良い。そうすれば必ず矢は精製されるはずだ」

そう言われ、桐人は試しに弓を引き絞る動作を試してみた。すると、

「わっ！マジかよ？」

弦と指の間に青白い矢が作られた。

そしてそれを射る。

バシユっという音と共に、矢が真っすぐ飛んだ。

「これなら勝てるかも
しれない・・・！」

だが、そんな桐人に
紗夜は、

「ただし、弓が私の力で
あっても、矢を精製する力はお前の物だ、
撃ちすぎは自滅を招きか
ねないから
注意しろ！」

「了解っ！！！」

桐人は軽く返事をした。

そして、物陰から飛び出してゆく。後ろからその様を見ていた紗夜は、

「死なないでくれ」

そう、小さく言った。

「こつちだ！このヤンキー野郎めっ！」

その声に、異形と化した
墮神は振り向いてきた。

「なアんだ、そんな所にいたのかぁ！」

グタグタと話す墮神を見て桐人は弓を構え、
宣言した。

「お前は必ず俺が葬って
やる！！！」

その発言に、目の前の巨人は言った。

「やレルモノならやって
ミろおおお！！！」

ドスン、と地面が舞い上がった。

戦いは、今まさに終局に
向かおうとしていた。

第7話 「屍と夜と月」

弓の弦に手を触れ、
桐人は弦を引き絞る。

直後、突如として弦を引き絞る右手に青白い矢が現れた。
その姿勢のまま、桐人は
それを目の前の化け物に
向けた。

「ナンだあそりゃ？
そんな玩具で俺様を殺ソウってノカ？フザケルのも
大概にシロ」

そう言つて、目の前の
墮神は大木のような金棒を桐人に向けた。が、
バシュッ！！という音と
共に墮神の片耳が一瞬に
して吹き飛んだ。

「・・・ナ、ナンだと？」

「大概にするのはお前の方だろ、墮神」

桐人は冷静に言った。

「て、てめえエエ！」

巨体と化した墮神は
勢いをそのままに突撃してくる。

あの金棒を喰らえば一撃で死ぬだろう、そんな考えが脳を死への恐怖に染め上げてゆく。
正直怖い。

しかし、どうしても守りたい者がいる。

だから”恐怖”を、守りたいという願望で塗り潰した。

「くらえ！」

バシユッと射出。

だが、移動しながらの攻撃は命中せず、代わりに遠くの木々に直撃する。

「くっ・・・外したか」

そう呟いて次なる安全地帯を見つけ、そこに向かう。が、

突如、目の前を砂利が飛び交った。

「くっ・・・！」

それを目視できたのも

つかの間、また妙な浮遊感に襲われる。

気が付けば、今度は地面に向かっていた。

「がはぁっ・・・！」激しい痛みが肩から伝わってくる。

どうやら地面に叩きつけられたらしい、と桐人は血が滲む袖を見ながら表情を歪めた。

すると、ふいに目の前から声をかけられた。

「よう、おめえは俺が金棒でしか襲って来ないとも思ったのか？」
獰猛な笑みを放ちながら、ゆらりと歩み寄ってくる。その姿はまるで、特撮番組にでてくる怪獣のようにすら見えた。しかし彼は怯まない。

「だから・・・なんだってんだよクソデカ野郎っ」

その直後、再び地面の砂利が桐人の周囲で飛び散る。それらは、桐人の剥き出しの腕を傷つけた。

「クク・・・言葉には気をつけるよ、クソガキ。

今てめえは俺の気まぐれで生きてるんだぜ？そこんところ、ちゃんと理解してるんだよなあ・・・？」

絶対たる神の力、それを前にして桐人は、

「雑魚はすぐに調子に乗りやすいんだな」

「はア？」

もう一度、桐人は言い放ってやった。

「雑魚が浮かれてんじや
ねえ・・・!!」

その言葉に、堕神が咆哮をした。
これまでにない何かが
辺りの空気を重くした。

「ナアアアんだと!?!
フザケるなああ!?!?!」

声と共に、巨大な脚がゴオツと音を立てて、桐人に向かって襲ってきた。

「くっ……!」

なんとか横っ跳びをして回避するが、その目の前には、すでに岩のような拳が迫ってきていた。

瞬時、顔をガードするが、
「んなつ!」

拳は、目前でいきなり開かれ、桐人の体軀をまるで人形でも掴むかの様に、がしつと糸も簡単に掴みあげた。

「ぐっ……! 離せ、
この野郎!?!」

「学習能力がないな、お前は……言葉が汚いぞ」
瞬間、ギィ、という音と共に桐人の体が締め付けられた。

「がはぁっ!?!」

すかさず悲鳴じみた声を

あげる桐人だが、その目は堕神の顔を、確実に睨みつけていた。

「ほオ、まだ余裕がおりなのカ？ソソならもつと痛くしないとなあ？」

ギリギリと、林檎を潰すかのように、堕神は拳に力を込めていく。

「ク、クソツタレ・・・
がっ・・・！」

桐人の口から涎が零れる。かつてない重圧に、彼の体は軋んだ。そんな戦いの様子を影から見ていた紗夜は、たまらず飛び出してきた。

「き、桐人っ！！！」

半ばばやけた意識に、その声と姿が意識をハッキリとさせた。だから、精一杯の力を込めて桐人は叫んだ。

「く、来るな！！！」

苦し紛れに叫んだためか、それは悲痛な声となって紗夜の耳に届く。

「やめろ、堕神！！
そいつを離せっ！！！」

「うるさい、カスめ！！！」

「テメエは後から粉々にしてやる!!」

「やめろ!やめ!!」

なおも叫ぶ紗夜に、墮神は地面を思いつき蹴った。途端に、地面がめくれ上がり、砂利が紗夜目掛けて飛来した。

「うあああっ!!」

その衝撃で、紗夜は軽く吹き飛ばす。

ゴロゴロと地面を転がり、すこし離れた所で止まる。彼女の服はボロボロになっていた。

「桐人を離せと・・・言っている・・・」

しかし、そんな言葉など聞きもせず、墮神は再び桐人に目を向けた。

反抗の眼差しを未だに自分へと向けてくる桐人に対して、墮神は急に桐人に声をかけた。

「ここまで苦しい目に合いながら、どうして降参しない?」

そんな声に向かって、桐人は苦しい様で言う。

「・・・あいつを、守りたいだけ・・・」

「守りたい……？」

明らかに怪訝そうな顔の
墮神は、更に質問する。

「テメエの親族でも、恋人デモ、友人でもないというノニか……？」

「ああ……そうだ」

「たかが今日一日出会ったばかりのクセにか……？馬鹿だろ、テメエ」

ニタリと笑いながら、墮神は続けた。

「くだらねえ他人なんか

捨てるヨ。しかもあいつは疫病神なんだぜ？

……それでも俺と契約
しないってのか？」

そんな誘いに、桐人は
答えた。

「もう、あいつの泣く姿を見たくないんだ……！
だから、お前みたいなのが組まない……！」

その言葉に、紗夜は顔を
赤くしたが、一方の墮神は顔を歪めていた。

「交渉、決裂だな」

ぐぐつと、桐人を掴んだ方の腕を天へと掲げた。
地上から6メートルくらい空中で、その腕がふいに止まった。

「残念だったナア、命が助かったかもしれないと言うの二……」

そう言うと、墮神は大きく振りかぶった。
その様子を見ていた紗夜は途端に叫んだ。

「やめろ！！殺すなら私を殺せ！！」

そんな声など、怒り心頭の墮神にとっては何の意味すら持っていなかった。

「や、やめ　　！」

瞬時、時がゆっくりと流れた。

そして、

桐人と紗夜の目が合った。

まるでスローモーションのような世界が展開される。紗夜は半泣き顔、だが、

桐人は笑っていた。

紗夜をみて、仕方なさそうに、微笑みかけていた。

「ゴメン、な　　！」

「っ……!?!」

何故か、桐人の声が聞こえてきた。

距離があるのに、まるで

目の前で言われたかの

ように、はつきりと。

そして時は流れ出した。

ズドン!!という音と共に紗夜の目の前で、砂利が　　飛散した。
何かが紗夜の目前に飛んできたのだ。

思わず飛散してきた砂利に頭を腕でガードしたが、
目の前に飛んできた物を
予想する、が

「あ　　」

土煙が消え去った中、
その中心に、

「い、やだ……」

腕の関節をおかしな方向に曲げ、

「やだ、やだぁ……」

頭から血を流し、死んだ魚のような瞳をして、

「いやあ……き、」

桐人が、

「桐人 ……！！！」

血まみれで死んでいた。

月が、静かに雲に隠れた。

第8話「疫病神の名」

沙夜は、ただ呆然と目の前の”死体”を見る。

ぐたりと倒れたまま、目の前の彼は動きすらしらない。目は開かれたまま、口からは大量の血が流れている。

明らかに、生きている状況ではないだろう。

「くハハハ！このガキは最高ツだな！」

そんな放心状態の沙夜の耳へ届いたのは、悪意の塊のような一言。

「ツたくよお、疫病神何が気に入るんだっての！」

馬鹿みてえだ！」

それは、自分を守ると言ってくれた者への、明らかな侮辱の言葉だった。

「桐人・・・桐人・・・」

涙をボロボロ流しながら、死体となり果てた桐人の体を揺らす。しかし、彼はやはり微動だにしなかった。

「まア、所詮は虫けら。」

虫の命なんざ潰したってえ面白くねえんだよ！！」

ドン！と地面を叩き、怒りをあらわにして墮神は言う。

「はぁ……………あとは非力な

おチビちゃんだけか」

つまらなそうに墮神は呟くと、金棒を担ぎ沙夜へと近づく。

しかし、下を向いたままの沙夜は動こうともしない。

「少しは楽しめると思ったんだが……………」

墮神がぶつぶつと呟く間にも、沙夜と墮神の差は縮まってゆく。

そして、とうとう目前まで到達した。

「残念だったな、疫病神さんよオ。あんたの祠は俺が頂くから安心しろ」

そう言うと、墮神は金棒を振り上げた。

「じゃあな」

ニタリと笑いながら、墮神はソレを振り下ろした。

そして、一瞬もしない内に肉が潰れる音と、

なぜか、男の野太い悲鳴が辺りに木霊した。

「うがああああ!？」

墮神の、金棒を持っていた方の腕は、何故か完全に消失していた。

いや、粉々に消し飛んだと言ったほうが正しい。

「腕が・・・ああ・・・!」

痛みに狂いながら、男は
ギロリと何かを睨みつけた。

そこには、無傷の沙夜がいた。

しかも、周囲には何やら

うっすら光の膜のような物が張り巡らされている。

「切ノ紋章」

俯いていた沙夜が、顔を
上げる。

その表情は、先程とはまるで別人だ。

蒼の瞳は鋭さを増し、髪は不自然にも揺れている。

明らかな豹変に、墮神は

苦虫を噛み潰した表情を

浮かべた。

「テめえ・・・出し惜しみしてやがったのか！」

そんな怒声にも似た言葉に沙夜は、

「違う・・・」

そう答えた。

「私の力は周囲の魂の流れを乱す。それ故この者の魂を崩壊させかねなかった」

そこまで言い、

「だが…この者はもう、

この世にはおらぬ!!」

引き裂くように言い放つ沙夜は、一歩踏み出す。

「私はまた守れなかった。私は本当に疫病神だ……」
咳くように言う沙夜に対し墮神は、ただその場所で
構える事しかできない。

腕を失った彼は、もはやただの的だった。

「だから、せめて仇は取らせてもらおう」

言った刹那、青白い炎が沙夜を包んだ。

「ば、化物があ……ッ！」

墮神は、左腕に再び武器を出現させ、それを構えた。

「せいやぁッ！」

その墮神の一言と共に、
地面に亀裂が走る。

だが

「破ノ劫火」

沙夜のたった一言で、墮神の周りには炎が纏わり付いた。

「があぁあ!！」

身体が焼ける感触に、墮神は叫び声を上げた。
それは、熱した鎖を身体に巻き付けられたようなものだ。

そんな身動きが取れない彼の耳に、ふと声が聞こえてきた。

「侵食ノ顎」

刹那、自らの身体が吸い込まれるような感覚が、墮神を襲った。

「……くそつたれがああ」

だが、そこで彼の言葉は
ふいに切れた。

なぜなら、彼は見たからだ。

自分の身体が、まるで砂の彫刻のように崩れ去る様を。

(くそ、まだ消えるワケには……)

しかし、彼の下半身は完全に消滅していた。

それは、彼に終焉が訪れている事を明白にした。

「ちくしょじゅ……」

炎の拘束の中、彼はガクリとうなだれ、小さく呟いていた。

「これが、破……の……」

彼が何かを言おうとする前に、彼の身体は全て灰燼に帰した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390i/>

疫病神の黙示録

2010年10月10日02時02分発行